

ソフォニズバ・アングイツソーラ作《フェリペ2世の肖像画》におけるヤコブス・デ・チェッソリス『チェスの書』(1493年)からの影響について

平沢 遼(東北大学)

---

16世紀イタリアの画家ソフォニズバ・アングイツソーラは、女性美術家が少ない時代において例外的と言える名声を博した一人であり、スペイン宮廷で宮廷人の肖像画も残している。

本発表で扱うソフォニズバによる《フェリペ2世の肖像画》(1573年頃)は、同じくフェリペ2世を描いたティツィアーノやアントニス・モルと違い、装飾の無い黒い服を着て剣ではなく木製のロザリオを手をしている。男性君主の肖像画でこうした位置に手を描くことは当時としては例外的であり、画家独自の意図があったと考えられる。これまでこの画家の研究では自画像や身の回りの日常を題材にした作品における画家の自意識や制作環境に注目したものが多かった。その一方で本作をはじめとして、この画家の着想の源泉になったと思われる視覚的典拠の探求や分析はあまり進んでいない。そこで本発表では、《フェリペ2世の肖像画》を中心に画家の作品と、ヤコブス・デ・チェッソリスによる『チェスの書』(1493年、フィレンツェ発行版)や15、6世紀のプレイングカードやアリュエットに用いられたカードに描かれた挿絵との類似性について示し、画家がモデルを倫理的に優れている人物として示そうとした可能性を3つの点から提示する。

第一に、本作はチェスに関わる文献『チェスの書』におけるキングの駒の擬人像との類似性が認められる。また画家がイタリアで活動したキャリア初期の作品である《チェスゲーム》(1555年)や《メダルを持った自画像》(1556年頃)にも『チェスの書』やゲームカードの擬人像との類似性が認められることから、キャリアの初期から関心を持って用いられたことを提示する。

第二に、チェスやランプの持つ意味、宮廷でどう見られたかについて、当時チェスやゲームカードは遊びの道具である一方、戦術の学習や倫理観の低下の批判など宮廷人に対して教訓を提示する機能を持っていた点を提示する。特に『チェスの書』では駒ごとに表される人物のあるべき姿が示され、王や女王の持つべき美德についても語られることから、ソフォニズバによるフェリペ2世の肖像画にも同様の意図が込められた可能性を提案する。

第三にスペイン宮廷における肖像画の利用について、ソフォニズバによる肖像画の飾られた具体的な場所がわかっているエル・パルド宮のギャラリーを元に考察する。

ここでは画家による王妃イサベルの肖像画が飾られ、ギャラリー全体は宮廷や君主の持つ美德を鑑賞者に伝えるために倫理的模範としてのイメージを示す機能があった。

以上のことから、同時期にティツィアーノやアントニス・モルというすでに著名だった画家が勇壮な君主の肖像画を描いていながら敢えてソフォニズバが宮廷に招かれ、その作品が求められた理由として、同時代の宮廷におけるゲーム文化とその倫理的意味および機能を巧みに視覚化できた点が注目されたと解釈することができるだろう。